アイス

魔桜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
アイス

【Ｎコード】
Ｎ４１４７Ｚ

【作者名】
魔桜

【あらすじ】
主人公である雛原詩織は同じ家に住んでいる黒葛陸に好意を抱いていたが、のっぴきならない事情からその想いを伝えることができなかった。それによって起こる様々な問題にぶつかり、主人公が成長していく物語。

雛原詩織視点（1）（前書き）

少々、官能的な表現があり、また全体的に暗い内容となっているので、それらが苦手な方は読まないほうが無難です。

雛原詩織視点（1）

1

木製のドアの前で私は立ち尽くす。
意を決してノックしようとするが、何故か見えない壁に阻まれる。もう一度挑戦する前にゆっくりと木目を指でなぞる。この通り、ちゃんとドアに触れることはできる。できるのだが、どうしても部屋の中の人物を起こすことができない。
制服のスカートをぎゅっと両手で掴む。
どうしよう。せっかく早起きできたというのに、これじゃあまた昨日と同じように遅刻ギリギリの時間になってしまう。
そんなことになったらまた先生に怒られる。ただでさえあの担任教師は怒りやすいので有名なのに。
夏は終わったというのに、手から嫌な汗がじわりで出てくる。
どれだけ時間が経とうが、慣れないものはしょうがない。彼を起こそうとするとどうしても緊張してしまう。
いつもならば私の役目じゃないからやらないで済むのだが、昨日や今日みたいにたまにやらなければならない時がある。
彼と話すのが不愉快というわけではないのだが、相手が相手なのでどうしてもノックを躊躇ってしまっているのだろうか。
こうして彼のことを意識していると、途端に動悸が激しくなる。あまりにプレッシャーがかかりすぎて過呼吸になりそうになる。落ち着く為に深い深呼吸を数回やる。
よし、と握りこぶしで奮起し、再度挑戦しようとすうるがやはり駄目だった。
眼前のドアと私の右手はS極とS極の磁石のように接することができない。
――このままではおそらく一生。

まったく、どうしてこんなに私が焦らないといけないんだろう。
八つ当たりだというのは百も承知だがこれだけ私が失敗を重ねてしまうと、彼が自発的に起床してこないことが駄目だという発想になってしまう。
これだけやっても起こせないのなら、とにかく下に降りて朝食を食べないと。
私は溜め息を零しながら踵を返す。
すると、決してわざとでないが左手がドアにこつんと当たってしまう。
予期せぬ事態に全身から汗がどっと出る。
部屋の中から気だるげな呻き声と何かモノが落ちる音が聞こえる。どうやら彼もようやく起きてくれたらしい。当初の目的を果たしたことになったのだが、私にも心の準備というものがある。
だけどこうも不測の事態が降りかかってきてしまうと対処のしようがない。
逃げてしまおうか、それともあえて堂々と部屋に入ってしまえばいいのかを逡巡する。どっちを選択するにしろ早く行動しなければまた遅刻してしまう。
焦りすぎて私が右往左往しているとドア越しに声を掛けられる。
「……今、何時？」
私の肩がびくりと跳ねる。
欠伸交じりだけれどもようやく彼も少しは覚醒したようだ。相も変わらずの不機嫌そうな声音だ。
それはいつものことなのであまり気にはならない、と強がってみるけど本当は凄く気にしてしまう。相手が私のことをどう思っているかを考えてしまう。
私には一生分かることがないことを考えること事態、人生においては無駄以外の何物でもないことだとは自覚しているがどうしても考えてしまう。
「八時五分前です。今日の朝食は母と一緒に作りました。できれば

冷めないうちに早く起きて食べてください」
母と一緒に、というのを協調する。
平日の朝飯は毎回母が作っているだけなのだが、特別に今日だけは朝飯を一緒に作った。
私だって休日ぐらいはたまに作ったりするが平日に作るのは初めてだ。
母は目をぱちくりしていたが、私が朝飯を作る意図を話すと妙に納得していた。
あの笑みには少し癇に障ったけれど、忙しい中手伝ってくれたのだけは感謝しないといけない。今度お礼にマッサジーでもしてあげようかな。
「……うっ」
突然眠気が襲い、出そうになった欠伸を押し殺す。
私も彼同様そこまで朝に強いわけではないので、早起きする為にわざわざ携帯の目覚まし機能を使ったのだが、その効果はてき面だった。
私は三回目のアラームでなんとか起きることに成功できた。普段二度寝、三度寝を繰り返し、親に起こされるまで布団にへばりついて離れない私にしてはよくやったと誰かに褒めてもらいたいぐらいだ。
それにしても大音量で三回もアラームが鳴ったのに全く起きる気配がなかった彼の睡眠に対する執着心に驚嘆する。
「分かった。すぐにそっちに行く」
ドア越しになにやらがさごそと音がする。多分制服に着替えている音だ。平日朝の食卓に出る時はいつも制服姿なのでそのくらいは予想できる。
私たちが通っている男子の制服は地味でありきたりな制服なので他校からはあまり人気はないのだが、女子の制服は人気が高い。
特に合い服が一番可愛いといわれていて、襟がしゅっと引き締まるように細くなっている白ブラウスの上からは、ベージュ色のベス

トを着用する。そしてスカートは赤と黒のチェック柄で可愛くて目立つ上下の組み合わせで、その制服が目当てで通う生徒もいる。
かくゆう私もその中の一人だ。私がこの高校を選んだ理由は自分の家から一番近い高校だったということもある。
だけど今自分の着ている制服に憧れを持っていたからという理由も小さくはない。
「何？　他にも何か用？」
ドアの前に直立したままでいる私の気配に気づいたのか、ドア越しに苛立たしげな彼の声を投げ掛けられる。
「す、すいません！　すぅッ！――」
直ぐに下に降ります。と、言葉を続けられることは出来なかった。謝罪の直後に思いっきりドアに頭をぶつけてしまった。しかも思いのほか勢いがついていたので、少しばかり涙目だ。
意地で苦痛の悲鳴だけは上げなかったが、ほとほと自分のアホサ加減に嫌気が差す。
自分が失敗してしまうところを、いつもこうやって一番見られたくない人に見られてしまう。いや、今日はドアがあるので、失敗してしまった瞬間を見られずに済んだから、まだ良かったと思うべきだろうか。
「お前、何やってるんだ？」
心配というよりは呆れきっている声にさらに落ち込む。私はひりひりする額を抑える。
「な、何でもありません」
とにかくこれ以上彼に醜態を曝す前にここを離れたい。私は失敗を挽回しようとすればするほど、何かしら失敗してしまうか救いがない。
どうすれば私も麻美のようにしっかりとした人間になれるんだろう。でもきっと私はあんな風に自分の指針をしっかりと定めて突き進むことは到底できっこない。
だったら今は自分のできることをやっていくことに専念しよう。

私は足早に階段を下りた。

雛原詩織視点（1）（後書き）

現時点でダメなところがあればご指摘ください。

雛原詩織視点（2）

ダイニングルームのテーブルに、ハムエッグに味噌汁、納豆と漬物といった一般家庭な朝の献立を並べる。素朴な料理の方が男の子はぐっとくるわよと、母に言われて私も作ったのだが、今さらながら母に一言物申したい。あの、全部あんたのことは分かっているわよっていう態度が気に入らないし、あの人の言い方はいちいち古臭いのもどうかなって思ってしまう。

まだ寝ぼけ眼な黒葛くんは椅子に座ると、そのまま薄型テレビの電源を入れる。家の中に朝のニュース番組の音が流れるが、正直ありがたかった。

もしも黒葛くんがテレビを観てくれなかったら、確実にこの場に沈黙がずっと続いていた。そんなたいたたまれない空間に居続けなければならないことを考慮すれば、今の状況が最善だといってもいい。

それは頭では理解できている。それでも私は考えなくてもいい余計なことを考えてしまう。

黒葛くんは私とそんなに話したくないのかな、って。

「ご飯はどのくらいつぎましょうか？」

「普通」

私ははい、と答えて、炊飯器から玄米と白米が一対一で混ざったご飯を私と黒葛くんの二人分よそぐ。

男が食べるご飯の普通量と女の普通量ではかなり相違があり、慣れるのに時間が掛かった。だけど今では黒葛くんや、黒葛くんのおじさんがどのぐらいの量をつげばいいのかようやく丁度いい量を定めることができるようになった。

こうして彼と暮らすようになってそれほど時間は経っていないが、こうして少しずつ距離を詰めていければいいと思う。

「どうぞ」

「……ん」
黒葛くんは頬杖をつきながら片手でお椀を受け取る。視線はテレビに釘付けで、私を見ようとする気が全くないように感じられる。
ここまで露骨に避けられると返って清々しい。私は彼と向かいの席に座わる。
そして手を合わせる。
「いただきます」
「……いただきます」
挨拶や最低限のことはこうやって喋ってくれるが、それ以外のことは一切不要で、私と話すこと自体が損だと考えているかのように黒葛くんは私と関わることに積極的ではない。それは今までの彼のアクションを思い返していけば分かりきったことだ。
黒葛くんが味噌汁に手をつけると眉を顰めた。
良かったと、私は内心安堵し、心の中でガッツポーズをとる。
あれは唯一私一人だけで作ったなめこ汁だ。母親に手解きを受けながら料理したのだが、これだけは私の自信作だった。だからこそ黒葛くんが気に入ってくれるか懸念していた。それがこうも露骨に反応してくれると作り甲斐があったというものだ。
黒葛くんが眉を顰めるのは、頬が緩む衝動を必死で抑えている証だということをこの前黒葛のおじさんに教えてもらった。それを聞くまで私は黒葛くんが眉を顰める度にビクビクしていた。だけど、この様子だと気に入って貰えたようだ。
その後、黒葛はこっちに全く視線を合わせないまま、ご飯とみそ汁を一杯ずつおかわりした。
私は喜んでよそぎながら普段は意識しない『早起きは三文の徳』という言葉を思い出だすと、思わず顔がにやけてしまう。
「親父と、雛原のおばさんはどうしたんだ？」
黒葛くんはハムエッグを咀嚼しながらちらりとこちらを一瞥する。
「お母さんと黒葛のおじさんは朝早くから仕事に出かけました。もしかして何か用事でもあったんですか？」

「別になにもない」
それだけ言うとまた黒葛くんはまた無言を徹底して貫いた。
私はそれから必死で学校の話題や、テレビの星座占いのなど、黒葛くんと私が話せそうな話題を振ったのだが黒葛くんは全く食いつくことはなかった。
「ご馳走様」
黒葛くんは食べ終わった自分の皿を流し台に持っていき、水につけ始めた。
私は目を丸くした。
彼が珍しく皿洗いをすることに驚いたのではなく、自分は朝食の半分も手を付けていない時間で、彼が食べ終わっていることに驚いた。ほとんど私しか話していないとはいえ、いくなんでも早すぎる。
急いで私が他のおかずに箸をつけていると黒葛くんは自分の分の皿をさっさと洗い終え、鞄を肩にかけていた。
「先に行く」
「ちょ、ちょっと待ってください！」
私はまだ手づかずのおかずは放っておき、箸を置くと椅子から立ち上がる。
そして、台所に置いてあった包みを取り出す。
赤い包みの方が私の分で、青い包みの方が黒葛くんの分だ。夏なら保冷剤などが必要となってくるだろうけれど、今の季節ならこのぐらいの包みで十分だ。
「あの、これお弁当です。迷惑かなっ……とも思ったんですけど、クラスで黒葛くんを見てるとお昼はいつも購買のパンばかりだったので、つい。やっぱりいつもパンばかりだと味気ないかなって思ったんですけど。あの、ちゃんと栄養も考えています。それで、あとですね、これ――」
「いい」
「はい？」
確かに彼の声で私の鼓膜は震えたはずだが、直ぐに頭に入ってこ

なかった。
朝食を作るだけならあそこまで早起きに固執しなくてもよかったはずだ。だけど私が携帯を使ってまで早起きした理由。それはただ、彼のためを想って弁当を作ろうとしただけ。たったのそれだけのことだったけれども、私にとっては大切なことだったんだ。
それなのにいくらなんでもそんな素っ気ない言葉、一言で私の行為を無下に断るのは私に対してあまりに酷であるとはいえないのだろうか。
だけどもこの感情はお門違いだ。勝手にお弁当を作ってはしゃいでいたのは他ならぬ私なのだ。
「いらない」
「そ、そうですよね。すいません」
一分の隙もない、突き放したような黒葛くんの言い方に意気消沈する。やっぱり、いきなりお弁当とか気味が悪かったのかな。重かったのかな。
でも、私ってあんまり人に誇れるところがない。
そんな私が頑張れるのは料理だけだ。私が黒葛くんにできることはそれぐらいしか思いつかない。それが否定されたら私はこれから何をしていけばいいのか分からない。もう、私は何もするなってことなのかな。
そんなの、嫌だ。
黒葛くんはご飯をおかわりするぐらい、私の料理を食べてくれたから口に合わないわけじゃない。だったら受け取ってくれてもいいと思う。それができないってこと、つまりそれは――
「あの……や、やっぱり、」
「いらない」
私のことが嫌いだってことだ。
一度も振り向かないまま黒葛くんは家を出ていく。
これで、家には私一人きりだ。テレビを消してしまうとどうしようもなく空しくなるような沈黙がこの場を支配する。

分かっているつもりではいた。けれど私と黒葛くんと間を隔てている溝がこんなにも深いとは思わなかった。
どうやったって昔のように仲良しこよしというわけにはいかないみたいだ。どうしてこんなことになってしまったのか過去を振り返ってみると、それはそれで仕方のないことだと納得するしかない。
「はー、やっぱり駄目だったかあ」
独り言を聞く人間はいない。私は存分に独りごちる。
この家に来てからは少しでも距離を詰めようと自分なりに努力しているつもりだったのだが、中々実は結ばない。
「私達、幼馴染なのにな……」
子どもの頃は辛いこともたくさんあった。だけど、こうやって瞼を閉じて思い出すのは黒葛くんとの思い出だけだ。
だけど、久しぶりに会った君は、私の思い出の中の君と全然違っていた。

黒葛陸視点（1）

†

俺と詩織は家族ぐるみの付き合いだった。
お互いの親同士が大学時代の同級生だったらしく、久しぶりに会って意気投合したらしい。
結婚生活においての愚痴や子育ての大変さだけでなく、大学時代の思い出を語れる。そして、住んでいる場所が目と鼻の先だから気兼ねなくいつでも話せる。となれば親しくならない方がおかしい。
そんなぐあいで両親が仲良ければ自然と子ども同士も仲良くなっていくのも必然で、俺達は物心ついた時からいつも一緒にいた。
小さい頃はそんな何気なくも幸せな日常がずっと続くと信じていた。誰だって子どもの頃はそうだ。成長すればするほど言葉にすれば恥ずかしい、『永遠』という儚く脆いものを真摯に受け止めて疑うことを知らない。
だけど、俺達の別れの日は突然きてしまった。
詩織の父親の仕事の関係上、詩織はこの地に居続けることはできなくなってしまった。単身赴任するには父親の家事能力は壊滅的であったらしく、どう足掻いても家族全員で引っ越さなければならなかったらしい。それだけ家族仲良いといってもいいだろう。
だけど俺の家の両親、特に母親は詩織の家族が遠くへ行ってしまうことに涙ぐむぐらい悲しがっていた。
それでも俺はそれ以上に辛かったと思う。
人前で泣きはしなかったが、枕に顔を押し付けて泣き叫んでいた。今考えるとあれだけ声が大きかったのだから部屋の外に声が漏れていたのかも知れない。それでも両親は俺に何も言ってこなかった。
それは素直に感謝しなければいけないことだが、今さらになって感謝を示したとしてもそんな昔のこと両親は覚えていないだろう。

それに片方の親にはもう会うこともできない。だったらこの気持ちは俺の胸にそっとしまっておくことにする。
あの時の俺はこのまま何もせずに別れるのだけは嫌だった。
もしも、このまま何もせずに離れ離れになってしまったら、それこそ俺達の関係は最後であるということを子どもながらに敏感に感じ取っていたのかも知れない。
だから俺達二人は約束をした。
俺の記憶が確かなら言い出したのは詩織の方だった。
「ねぇ、りっくん。私のこと好き？」
今は詩織から他人行儀でよそよそしく黒葛くんと呼ばれているが、当時は名前の陸からとったのか、あだ名でりっくんと呼ばれていた。
それに今頃になってりっくんと呼ばれたとしても恥ずかしくて返事もまともにできないだろうから黒葛くんと呼ばれることには異存はない。
「うん、好きだよ」
好きだという言葉をおくびにも出さないで言える年齢だった。好意がある人間に率直に真意を告げるのは今の俺にとっては困難なことになってしまった。
「じゃあさ、結婚式やろうよ」
「結婚式？」
結婚式という単語が幼かった詩織の口から出てくることは完全に俺の思考の外にあった。
流石に俺はその時狼狽していた。
将来俺が誰かと結婚をするにしても遥か遠い未来のことだと高を括っていた。それをまさかこんな小さい時に経験するなんて思ってもいなかった。
「そう！　私とりっくん二人の結婚式」
反対の意思はなかった。
今思い出せば恥ずかしくて、身体中がこそばゆくなるような子どものくだらないごっこ遊びだが、あの時の俺達は真剣そのものだっ

た。
擬似的な結婚式を挙げることができれば、俺達の心はいつまでも繋がっていられると微塵も疑っていなかった。二人が物理的にどんなに離れていても、上空を仰げば、青い空が世界中どこにだって繋がっているように、きっと。
だけどそれは子どもの特権であり、くだらないもの。だけど、だからこそこうして思い出してみると輝かしいものだ。

黒葛陸視点（2）

結婚式会場は近所の公園でひと気のない時を狙った。
あの時は確か夏の頃だったと思う。
蝉を捕まえては詩織に見せていって、その都度怖がって逃げる詩織の後姿を追いかけるのが楽しかった。
バッタが跳ぶ姿を見て興奮して作業そっちのけになってしまいそうになったのだが詩織に睨まれて捕獲するのを断念したりもした。
虫の誘惑を断ち切り、俺はそこら中に大量に生えてあるシロツメクサで簡単な花飾りを制作し、詩織の頭にかけてやった。
結婚式に花嫁が頭にのせる髪飾りの代用品としては少し心許無いかもしれないが、あいつは非常に喜んでくれた。
「ねぇねぇ、今の私って綺麗に見える？」
「ああ、綺麗だよ」
無理にはしゃいでいる姿が痛々しく、俺はそれに精一杯気づかない振りをして一緒に和気藹々としていた。
この儀式が終わってしまったら本当に全てが終わってしまう気がしていたけれど、そんな考えは頭の隅においてやらなければならない。少しでも頭によぎってしまえば白けてしまう。悲しくなってしまう。
それに、結婚といえば大人がすることで、それをやれば俺達だって大人に近づけることができる。それがなんだが誇らしかった。今思えば滑稽以外のなにものでもないが。
「あなたはよき時もあしき時も、とめる時もやめる時も、えっーと。と、とにかく二人とも愛し続けることを誓いますか？」
滅茶苦茶な神父様の口上だったが、詩織の一生懸命さは充分伝わってきたし心が揺り動かされた。
詩織は餅のように丸く白い頬を赤く染めながら瞳を閉じる。それは俺が誓いの言葉を返答することを信じて疑わない、迷いの見られ

ない行動だった。
だけど俺は、詩織が言った『愛し続ける』という言葉だけがどうも気になった。気に入らないというわけじゃないが、どうしても引っかかってしまった。
人を愛すって、一体全体どういう意味なんだろう。
詩織と誓いを交わそうとする前に俺はそんなこと考えたことなんてなかった。
好きだという言葉の意味は理解できるけれど、愛すという言葉と何がどう違うんだろう。同じ意味な筈なのに何かが違う。
そんな簡単に人を愛すなんて口に出していいのだろうか。俺達子どもが軽々しく言ってはいけないような、俺達が考えているよりももっとずっと重い言葉なんじゃないだろうか。
俺はこのまま素直に返答してしまっていいのかどうか分からなくなってしまった。
やる前は自分の行動に意義があると自信があった。だけどこんな土壇場になって俺という人間はぐだぐだと考えてしまっていた。
俺はもしかしたらあの時、生まれて初めてあんなに悩んだのかも知れない。
ふと、気が付くと詩織は閉じていた瞼を開けていた。
そして詩織の大きな瞳には不安の色が宿っていた。その瞳からはもう少しで透明な滴が零れそうだった。
「んっ、んん」
それでも彼女は必死にそれを抑えていた。唇を強く噛み締めながら目を眇めていた。
俺の前では絶対に泣かないという断固たる決意に満ちたその顔を見て俺は決心した。
これからのことを子どもなりに覚悟した。
たとえどれだけ離れていても、どれだけの月日を経た先にどんな困難があったとしても、それを乗り越えていく覚悟。
それがあるかどうか。

俺は口を歪め、その時の自分自身の答えを出した。
「誓います」
彼女は泣き出しそうだったことをすっかり忘れたように天使のような笑みを浮かべる。
その時俺は勝手に誓ったんだ。
俺は絶対に彼女を泣かすようなことは絶対しないということを。
それは今でも俺の心にしっかりと刻まれている。
あいつの泣き顔を見るぐらいだったら俺は――。

†

雛原詩織視点（3）

季節は初秋。
夏は分厚かった雲は、誰かが無理矢理千切ったかのようにガリガリになっている。そして茂っていた青葉はゆっくりと時間をかけて紅葉になっていく。朝から汗が出ていたあの時が懐かしく、今は少し肌寒さを感じる、そんな季節。
学校へと続く緩やかな坂道には、同じ制服を着た生徒達で溢れている。
「うっ！」
その内の男子生徒の鞄の金属片に太陽光が偶然反射する。私は目を眇めながら片手で影を作る。
その手よりもさらに内側に、何者かの両手が突如私の顔に当てられる。つまりは、いきなり後ろから掴まれ目隠しをされた状態。
「だーれぇーだ？」
こんなことを早朝から仕掛けてくる人間は、私の知り合いの中で一人しか該当しない。良く言えば自由奔放で天真爛漫。悪く言うと利己的で子どもっぽい。
だけど、
「麻美、おはよ」
「ハロー、詩織。今日も格別に可愛いわね」
瀬川麻美は、私の親友でありクラスメイトだ。
高校生離れしたプロポーションと快活な性格で男子生徒はおろか先生にまで人気が高い。そのせいで女子生徒からはやっかみの的だが、麻美自身は全く気にならないらしい。そのへんは麻美らしい。
「うーん、ほんっ――とに可愛いっ！　いますぐ食べちゃいたいくらいっ！」
「ちょっと、止めてよ麻美。みんな見てるってば」

麻美は人目を憚らず、私を後ろからぎゅっと抱きしめた。まばらに登校していた生徒は、奇異なものを見る目でちらちら盗み見ていた。

私は麻美と違って目立つのはあまり好きじゃない。やるにしても教室でやってくれないと、ここじゃ周りの視線が集まりすぎてしまう。

「いいじゃない、なにか減るもんじゃないんだし。それよりも詩織の身体ってぇ、干したばっかりの布団みたいにやわらかーい。一家に一枚は欲しいわ」

猫なで声で寄りかかってくる麻美を私は強引に振り払う。こうでもしないと麻美はどいてくれない。

「もうっ！　私は布団なんかじゃないからっ！」

「ごめんねぇ、詩織。でも珍しく朝から詩織の後ろ姿が見られたと思ったら詩織へのラブがどうしても抑えられなくってぇ」

確かに麻美と登校時間が重なるケースは稀有だ。ほとんどの場合、朝の弱い私が遅めに教室に入ると麻美の方が先に来ている。

そして、麻美は周りにいるたくさんの男たちを掻き分けて私に抱き着いてくる。麻美特有の外国人ばりの挨拶は、はじめどう対処していいのかあたふたしてた。だけどいまでは麻美のハグ攻撃に慣れてしまった。そんな自分が恐い。

「いいから、もうっ行くよ」

私は憤ったふりをして麻美を促して急かす。スキンシップをしてくるのは私のことを憎からず思っていてくれているということだろうけれど、やっぱりこのまま毎朝抱き合っていると良くない噂が飛び交うだけだ。

ここは私が心を鬼にしないと、マイペースな麻美と永遠にこの押し問答が続いてしまう気がする。いや、この場合は押し問答とよりは麻美が聞く耳を持たないので、「暖簾に腕押し」という語句が適切かも知れない。

「ああっ！　待ってよ詩織。怒んないでよ。ねっ、ごめんってば」

私は早歩きで麻美の静止を振り切る。ここで甘い顔を見せてしまえばまた彼女は調子に乗ってさらにエスカレートした甘え方をしてしまうだろう。

麻美の猫のように自分の人生を楽しんでいる姿はとても好意的に見える。そんな生き方ができるのなら自分だってそんな人生を送ってみたいとさえ思える。

それだけ彼女のことが羨ましい。

だけど、どんなことにでもいえることだろうが、限度というものがある。

麻美は私に必死で平謝りしながら駆け足で追いかけてくる。それ以上の速さで私は振り切ろうとしたが、学校の靴箱に着いてしまったので足を止めざるを得ない。

「ね、この通りだから」

両手をすり合わせながら頭を下げられてしまい、その光景にまたもや周りの視線が集まってしまう。

麻美の長髪で顔色が確認できない。ただの予想だが私から顔が見えていないから絶対に笑っていると思う。

私が怒ると、どうしてだがみんな馬鹿にしたように笑ってしまう。どうやら全然恐くないらしい。

虚仮にされるのは心外だけど、他人を怒ることができない性格の私に迫力が皆無なのはしかたない。そう、諦めているけど、こういう時には威圧感が欲しい。

私とは逆に、黒葛くんの顔が険しくなっただけでクラスには妙な緊張感がはしる。あの雰囲気になっただけで胃がきゅっと絞まる。彼の逆鱗に触れないようすることがクラスメイトの暗黙の了解になっている。黒葛くんぐらいドスの利いた声で言えば、麻美だって少しは反省するだろうけれど、持っていないものをいつまでもぐちぐち嘆いていもしかたがない。

それにしても麻美は、私が許すその時までこの低姿勢を保つらしい。妙に背筋を伸ばしたままで腰を折っている。

他の人間がこの姿勢でいると井戸から這い出てくる幽霊に見えてしまうだろうが、彼女は違っていた。
さらさらの長髪はなだらかな曲線を描いていて、まるで川のように瑞々しく潤っている。
麻美のように胸に届きそうなぐらい長髪だと手入れも大変になってくるのにどうやってここまでツヤのある髪の毛を維持できているのかが不思議だ。
私は肩にかかる程度の髪の長さでも毎朝、髪のセットで悪戦苦闘しているのに。
「……いいよ。最初からそんなに怒ってないよ。だからもう顔あげてよ」
麻美はさっきまでの態度とは裏腹にばっと、元気よく顔を上げる。その顔には満面の笑顔があり、その太陽のような眩しさに目を背けたくなる。
「あ、り、が、とぉ、詩織！　さっすが、私の嫁ね！」
控えめに言って肩に抱き着くという行為だが、実際はもっと艶めかしかった。麻美のしなやかで色っぽい肢体が私の身体に絡みつくようにくっつく。
すると否応なしに、普段考えないようにしていることを意識してしまう。
麻美の私に対する布団のように柔らかいという形容詞に他意はない。ないと思うのだが、まるで遠回しに私の身体はぽっちゃりしてしまっていると指摘されたみたいであまり気分のいいものじゃない。
麻美は好き好んで他人に対して誹謗中傷することはない。だけど彼女の常に羽を伸ばしているような言動に振り回されて傷つくことは多い。
けれど彼女にも悪気がないのだから注意するのも違う気がする。それでも、こうも毎日のように抱きつかれているとこっちの身も持たない。
「もう、反省してるのっ？」

「反省してるわよ。だから怒らない、怒らない」
彼女の反省しているは、反省していないの同義語だということは身に染みている。ここまで自己を徹底して貫かれるとこちらの方が折れてしまう。
私が苦笑しているとそのことに気付いた麻美はふふっと微笑を浮かべている。
「それじゃあ、教室まで競争ね」
「えっ？　ちょっと、待って麻美！」
不意を突かれた私は麻美に置いてかれてしまう。私は鞄を抱えながら必死で追いかける。最後はいつも麻美がこうやって強引に主導権を握ってしまう。
いくら女子からの嫉妬があるとはいえ、裏表のない麻美の性格は男女関係なく大多数の人間から好かれている。
なのに、どうして私なんかの相手をしてくれるのかいつも不思議だと考えていた。その疑問は時間が経つごとに肥大していき、ある時とうとう私は訊かずにはいられなかった。
私がその疑問を明言した時に麻美は一瞬呆けたが、その直後にふっと微笑を浮かべた。
「ばっかだねぇ、詩織は。そうやって自分を戒めることができる人間ってさ、世の中にはそんなにいるもんじゃないのよ。みんながみんな自分は正しいと思い込んでいるもんなのよ。……それは私にも言えることなんだけどね。なに？　その顔？　やっぱり気付いてなかったんだ、自分の価値ってやつに。あっ、価値って言っても詩織を物扱いしているわけじゃないわよ。そーだねぇー、言い方を変えれば長所ってやつかな。だから私は詩織と一緒にいて全然苦痛じゃない。っていうか一緒にいて楽しい。うーん、だーかーら、とにかくさ、私は詩織の――親友なんだよ」
最後に私が見た麻美の表情はいつになく能面で、だからこそ彼女の言葉は私の心に響いた。葉に付いた露が重みに耐えられなくなって落ち、湖水に波紋が広がるようにゆっくりと、そして確実に私に

心の一番奥底に染み渡った。
そして私は麻美に抱きついた。そんな私を麻美はいつものようにじゃれ合う為ではなく、透明な雫が頬を伝うことのないように私を抱きしめ返してくれた。
麻美の方が私よりも背が高くて、私の頭に彼女の顎が当たる。場違いにもそれが気になったけれど、彼女の腕が私に回ると何も言えなくなってしまった。
自分でも単純で馬鹿だなって思うけれど、泣き出してしまいたい衝動に駆られる。
私は昔から何もしていないのに人の反感を買ってしまう気質があるらしく、他人からの純粋な好意を受けることがなかった。
だから、いつも友達になった人間に私がどういう風に思われているのか確認してしまう。そんなことをしてしまえば、嫌われると分かっていてもどうしても不安になってしまう。そして、いつも友達だった人達は私から離れていくんだ。
……だから、麻美から言われた言葉は私が日頃から一番言われたかった言葉だ。
自分の存在を認められるってことは、普段は気付かないことだけど本当は尊いことで、人生の内に何度あるか分からないものなんだ。
こんな欠陥だらけの私でも、麻美は親友だと言ってくれた。それが嬉しくないわけがない。
「よーし、お先に！」
麻美がドアに手をかけ、教室に入りそうになっている。私は周りの男子生徒達が唖然としているのを無視しながら全速力で彼女の後を追いかける。
……たとえ彼女のことを追い越すことはできなくても、せめて彼女の横に立てるように努力したい。
なぜなら親友はいつだって傍にいて、何かあったら相談に乗って、そして絶対に裏切らないってことだって私は思うから。

雛原詩織視点（4）

教室にはほとんどのクラスメイトが登校していた。
やっぱり朝ご飯を食べるのに時間がかかり過ぎたのと、麻美と喋りながら登校したせいで遅刻ぎりぎりの時間になってしまったのだろうか。
私は教室に掛けられていた時計に目をやる。
だけど、予想外にも時計が指し示す時刻は、私がいつも登校する時間よりはむしろ早いほうだったので私は首を傾げる。
どうしてこんなに人数がそろっているんだろう。
私の様子に気づいた麻美は、教室の中でも人口密度が異常に高い一角に指を指した。
「きっと、あれをやるためなんじゃないの？」
なるほど。
男子生徒達は死にもの狂いで、昨日出題された英語の宿題をやっていた。あんなに慌てる位なら事前にやっておけばいいのに、といつも私は疑問に思う。
私の高校の英語教諭は自分から率先して授業をやろうなんて殊勝な人じゃない。あの先生の英語の授業は毎回宿題の答え合わせで全てが終わるつまらないものだ。つまりは授業時間ずっと宿題の答え合わせができるように、大量の宿題が出されることになる。そうして、毎日宿題に手を付けない男子は、毎回のように悲痛な声を上げている。
最初の頃はまだ真面目にやっていたのだが、この時期になってくると学校の雰囲気にも慣れてしまったのか、最近はめっきり宿題をやらなくなってきている。
その男性陣の中で悠々と、余裕の表情をしているのは黒葛くんぐらいなもので見ていて悲惨だ。英語の担任教諭はそれら全てを見越

して黒葛くんと女子生徒には黒板の前に立たせない。
その陰険さが更なる反感を買うことを助長していることに、あの教師は気が付いているのだろうか。　大人になると子どもの頃に何を考えていたのかもすっかり忘れてしまうらしい。
先生だって今の私達と同じように教師に腹を立てていた筈なのにミイラ取りがミイラだ。それとも、自分が受けた仕打ちと同じ仕打ちを生徒にすることによって自分のストレスを解消しようとしているのだろうか。
どちらにしろ救いがたい思考の持ち主だ。
「黒葛！　頼む。今回だけ！　今回だけでいいからっ、お前のテキストを写させてくれ！　でないとまたあの先生に虐められちまうよ」
今にも土下座しそうな勢いで黒葛くんに助けを乞いている男子生徒は、橋下一樹くんだ。黒葛くんとは正反対の軽薄な性格なのに、なぜか二人が一緒にいるところをよく見る。
でこぼこな二人だからこそ、足りない部分を補っている関係なのかも知れない。それをいうなら私と麻美も全く違う価値観を持っているのに噛み合っている。
だったら私達もへこんでいる部分を埋め合う関係なのだろうか。
そうは思えないけれど。
私はでこぼこだらけの獣道で麻美はコンクリートのように完璧に舗装されている気がする。
でも、だからこそ私達は一緒にいれるのかも知れない。……それなら噛み合う筈がないか。
確かに完璧に見える麻美だけど、女子に嫌われているという事実がある以上何かしらの欠陥を抱えているのかも知れない。
それは、彼女の性格だろうか。でも、彼女の自然体ともいえる姿勢は私の憧れるところで、良いところでもある。それとも、別の何かがあるのだろうか。
宿題のリミットに追われている他の男子生徒も蜘蛛の糸に縋るような眼で黒葛くんを見る。

「お前のそのセリフ、毎日のように聞いている気がするが、俺の気のせいってことでいいのか？」
「頼むよ、な！　俺らの仲じゃないか！　ちょっと写すぐらいいいだろ？　お前が損することなんてなにもないんだからさ」
黒葛くんはしがみつきそうに被さってきた橋下くんを苦々しい表情でひらりと躱しながら、痛烈な言葉と汚いものを見るような視線で冷たく突き放す。
「ちょっと、ぐらいならな。お前らいつも俺のテキスト全部写すだろうが。写すなら写すで少しは頭を使ったらどうだ。解答を少し変えるぐらいの工夫ぐらいしろ、馬鹿かお前らは！　それに損ならあるぞ。お前に何かしてやるたびに俺の寿命が一か月程縮まる」
「寿命が縮まるって、俺と相手するのにどれだけのストレスを抱えているのか図り知れねぇだろ。そんなに俺ってウザい？　まあ、俺と関わっちゃって黒葛も大変だろうけれど、その言葉を投げかけられた俺のことも考えてください！　そんなこと言われたら俺はこれから先どうやって生きていけばいいのか分からねぇだろ！」
黒葛くんの言っていることは正論で、橋下くん達のやっていることはあまり感心できない行為だ。けれどあれほど手痛く痛めつけられた橋下くんを見てしまうと彼に同情してしまう。
教室の時計にちらりと目を移すとそろそろホームルームのチャイムが鳴る時間が迫ってきている。
ホームルームが終わった後に十分間の猶予はあるが、その短時間ではあの宿題量とこの男子生徒の人数から逆算して到底間に合うとは思えない。
だからこそ今黒葛くんをなんとか説得しようと橋下くんはあんなにも必死なんだ。
「ああ、俺たちは馬鹿だよ、大馬鹿だよ！　黒葛とは違ってなっ！　だけどなぁ、そんな俺らにだって譲れない一線が、プライドってもんがあるんだよ！　あの糞教師が宿題をしない俺らを毎度毎度馬鹿にした笑いには俺らだって腹に据えかてんだ！　だから、例え俺

らの成績が悪かったって、宿題ぐらいはやるってことをあいつに見せつけてやりてぇんだよ！」
　完全に逆切れだろうけれど、その言葉には得体の知れない力がこもっていた。
だけどこうして頼み込んでいる時間があればまだ自分自身で宿題を進めた方が効率的だ。それでも頼み込むのは自分で宿題をするよりは黒葛くんの宿題を写す方が楽だからだろうか、それとも今更後には退けないからだろうか。
　橋下くんの言葉には頑強な芯が見え隠れしていた。鉛筆のように力を入れてしまえば簡単に折れてしまうようなものだが。
「だったら、自分の力でやれ！　だからお前ら馬鹿にされんだろーがっ！」
　本気で激昂する黒葛くんに、橋下くんが怯む。
　周囲の人間はもっと引いている。黒葛くんのあまりの剣幕に教室が静まる。宿題を写そうと雁首をそろえていた男子生徒も、おしゃべりをしていた女子生徒も黙った。
　それだけ黒葛くんの三白眼には迫力があって、教室の時間は止まったかのように誰も動かない。そんな誰もがこの事態をどう収拾しようか迷い、何もしようとしない他人任せの状況。雰囲気。
　そこで、麻美だけは動いていた。
「もう、黒葛くん。ちょっとぐらいテキスト貸してあげてもいいじゃない。橋下くん達が困っているのは本当みたいなんだし」
「……瀬川。こいつらを甘やかすと後々ロクなことにならないぞ」
　一見、橋下くんに助け舟を出したように思えるこの麻美の言動はきっと、黒葛くんを助けるためだ。　もしもあのまま麻美が何もしていなかったら黒葛くんの周囲の評価は最悪になっていただろう。
　こんな最悪の事態をたったの一言でひっくり返すことができるのはきっと彼女だけだ。私は何もすることができなかった。いや、ほかの人たちと同様でしようともしなかった。私には何もできないから、やろうとしてもきっと悪い方向にしか進まないとから何もしな

い方がマシだって思った。
　でもそれは黒葛くんと真正面から接する勇気がないだけのただのいい訳にしかならないんだ。
でも、一つだけ自分に言い訳させてもらえるなら、あれだけ黒葛くんに拒絶されたら、他人から鈍いと揶揄されている私だって心が傷つく。これ以上私に頑張れというのは酷じゃないのだろうか。
　黒葛くんの席に近づいていった麻美に、橋下くんが狼のように迫る。
「ありがとう、瀬川。ああ、そうだよな。俺達も本気で困ってんだよ。それなのに黒葛くんは我が儘ばっかり言いやがってよぉ……相変わらずケチだなあ。よし、瀬川、もっとこの分からず屋に言ってやってくれ」
「ほらな。中途半端な優しさを振りまくと、調子に乗った変態にセクハラされることになっただろ。悪いことは言わないからそいつに関わるのだけは止めとけ。俺みたいに後悔することになるぞ」
　麻美の両手を強く握りしめている橋下くんを黒葛くんは睥睨しながら揶揄する。麻美は橋下くんの手をゆっくり外すと、黒葛くんにさらに接近する。
「いいわよこのくらい。有名税の一種だと思うことにするわ。それに私、こういったことには慣れているつもりよ」
　橋下くんのことはまるで眼中に入っていないかのように麻美は黒葛くんにウインクする。黒葛くんも橋下くんが何か言おうとして口を開きかけたが完全に無視していた。
「有名？」
「ほら、私って結構美人で有名でしょ？」
　抜け抜けと言い放つ麻美に、黒葛くんは一瞬きょとんとした後苦笑する。そうなったことによって、教室の空気も緩和する。
　凄いな、麻美は。
　私は文字通り何も出来ずに立ちすくす。
　周りから批難されるかも知れないギリギリな台詞だと思うのに、

あれだけの大胆発言を言えるのはきっと麻美の長所で、他の人間には決して真似できないことだ。
でも、その凄さが理解できない人間、いや心の底では分かっているからこそ、やっかみを入れてくる人間は少なくない。どうして素直に彼女の凄さを認めることができないんだろうなあって思う。
やっぱり光あるところに影ができるように、麻美を貶しようと少しでも足にしがみ付いていないと気が済まない人間がいてしまうということは宿命なのだろうか。
私は意図的に麻美の足を引っ張ってやろうだなんて考えたことはない。
ただ麻美という人間を尊敬している。
それだけのはずだ。
私が羨望の眼差しを送っていると、麻美は黒葛くんに耳元で何かを囁いた。その時、私と黒葛くんは一瞬眼が合った気がするが、どちらかとは言わずに目を逸らした。
麻美に何を言われたのかは分からないけれど、黒葛くんは分かったよ、と私がぎりぎり聞き取れた小さな声で呟くと、橋下くんに向き直る。
分かったと言った時に舌打ちのような音が聞こえたような気がした。
「ほら、もう時間ないからさっさと写せよ」
机の中から英語のテキストを取り出して渡すと、橋下くん達は歓喜の声を上げた。ありがとう、瀬川。困ったときの瀬川さん。やっぱり好きだ、瀬川麻美。黒葛を制御できるのは瀬川だけ。
「おい！　俺に感謝しろ！　俺に！」
怒号を撒き散らす黒葛くんだが、その表情は柔らかい。その程度は黒葛くんの許容範囲だと踏んだのか、橋下くん達は英語のテキストを取り戻そうとする黒葛くんをからかいながら、背を向け逃げ出す。
私は麻美が黒葛くんにどんな説得方法を試したのか気になった。

クラスメイトである男子達の塊を避けながらなんとか麻美に辿り着く。
「麻美、さっき黒葛くんになんて言ったの？」
「うーん、大したことじゃないわよ。私はただ黒葛くんの弱点をついただけ」
「弱点？」
「いくら詩織だからだって教えてあげられないわよ。こういうのはね、自分で見つけるからこそ楽しいんだから」
黒葛くんに弱点なんてあっただろうか。私が見ている限りどんなことも卒なくこなしているように見える。
敢えて短所を挙げるとしたら少し怒りっぽいところだ。そんなこと本人に指摘してしまったらさらに怒ってしまうだろうけれど。
「なーに？　どうしたのよ？」
無意識に笑っていた私に、麻美は自席に着きながら私に質問を投げかけてくる。
言ってしまいたいのは山々だがここで言ってしまうと黒葛くんの耳にも入ってしまいそうだから遠慮しておきたい。仮説だろうがなんだろうが、今黒葛くんを刺激してしまったら、それこそ火に油を注ぐ結果になりかねない。
「教えてあげない。こういうのは自分で見つけるからこそ面白いんだよ」
私はおどけた調子で麻美に言われたことをそのまま返す。
「……もう。そうね、だったら交換条件でどう？　私は黒葛くんの弱点は何かっていうことを詩織に教えてあげるわ。代わりに詩織はさっきなんで笑っていたかの理由を私に教えて。勿論、先に言わなきゃいけないのは詩織よ。なんたってこっちは秘中の秘。黒葛くんの、ううん、私のトップシークレットなんだから」
「えっ……」
麻美の破格の提案には内心かなり揺らいだ。私の笑った理由なんて些末なことだ。それと引き換えに黒葛くんの弱点を知れるなら言

うことはない。せめてこの場所を変えれば麻美に話せる。絶対に黒葛くんに言わないという条件なら私も気兼ねなく言うことができる。
「おい、瀬川。余計なこと吹き込むなよ」
黒葛くんが小声ながらも、ドスの利いた声で麻美を牽制する。
他の人間ならば少なからず引いてしまうだろうが、麻美は全く意に介さなかった。代わりに満面の笑顔を返す。
心臓に毛が生えているとはこういうことを言うのだろう。少なくとも私には麻美ほどの度胸は持ち合わせていない。
「ごめんね、黒葛くん。詩織がどうしても訊きたいって言うから仕方なく……」
「ちょぉっと――」
私が口を出す前に、麻美は手でそれを止める。つんのめった文句は私の胸の中で暴れるが、もう一度吐き出そうとする前に麻美に先を越される。
「詩織もごめんね、さっき言っていたあれは全部嘘だから。黒葛くんの弱点なんて知らないし、私が知っていたとしても詩織には教えません。ね、これでいいでしょ？　黒葛くん」
最後は黒葛くんに向き直って平謝りする。
黒葛くんは溜め息をつきながら麻美の席の隣に、つまりは自分の席に着く。
いいな、私なんて机五個分黒葛君と離れている。
でも、黒葛くんと近くの席になっても仲良くなれる気がしないし、グループ学習の時に気まずい思いをするだけだからかえってよかったのかもしれない。
麻美は黒葛くんとそれは楽しそうにお喋りモードに入ってしまった。居場所のなくなった私は自分の席に座る。
ホームルームが始めるまで暇だなと思い、私は教科書を開き予習をし始める。といってもやっているふりだけで、英語の文章は全く頭に入ってきていない。
麻美がいないと私は途端にやることがなくなってしまう。私も黒

葛と同じようにクラスメイトとは必要な会話しか交わさない。
だって、たくさんの人間と浅い関係を築くよりは、特定の人間と深い関係を結ぶ方がいいと思うから。
高校を卒業してからも関係が続く、そんな人間関係こそが本物だと思う。
だから私はこれでいいんだ……って思い込もうとしたけど失敗した。
そんなのは人間関係をうまく築けない人間の負け惜しみだ。
だけど今の私に何ができるかなんてわからない。ほんとうに何がしたいのかわからない。
わかりたくもない。

雛原詩織視点（5）

午前の授業終わりを告げるチャイムが鳴り、生徒達の緊張の糸は一斉に切れる。

先生が教室のドアを閉めたと同時に、開っきぱなしのノートに突っ伏した。慣れない朝起きの代償がここにきて表面化したようだ。

長時間そのままの態勢でいると額が赤くなって恥ずかしい思いをするのは目に見えているが、今は一瞬でもいいから安息の時が欲しいという願望の方が遥かに上回っている。

全校生徒は大体三組のグループに分かれる。

大食堂でリッチに日替わり定食を注文して、和洋の料理に舌鼓を打つグループ。

売店でお目当てのパンを奪取する為にクラウチングスタートで教師の制止を振り切り、廊下を猛烈な勢いで走るグループ。

そして、教室で優雅に悠々たる面持ちでお弁当を箸でつつくグループに分かれる。

机に何かを置かれた音で重い頭を上げる。できればそのまま眠ってしまいたいが、無視するわけにもいかない。それに休んだお蔭で少しは楽になった気がする。

「これ、落としてたわよ。早く机の上のやつ全部片づけて、一緒にお弁当食べましょ」

「ああ、ありがとう。ごめん、ちょっと待っててね」

麻美が拾ってくれたシャーペンを筆箱に入れ、机の上にあったものを机の中に全てしまうと、テキストとノートが分厚すぎて机の容量いっぱいになってしまう。どこに苦情を言えばいいのか分からないが、この机の小ささは勉強が本業の高校生にとっては致命的だ。

……といっても私はそこまで真面目に勉強をするほうじゃないが。

親にはそろそろ塾にでも通いなさいと口を酸っぱくして言われて

いるが、テスト前に必死で徹夜するタイプの私が塾に行っても根気が長続きするとは思えない。
私は机の横にかけてあった鞄を取出し、机の中を整理して午後の授業に備える。
私と麻美はいつも学習机を向い合せてお弁当を広げる。つまりは三つ目のグループだ。彼女は前の席の女子に机を動かしていいか了承を得て、私の机とくっつける。
いつもは学校での時間の中で昼休みというこの瞬間だけを心待ちにしているといってもいいぐらいなのだが、今日の私の心は曇り空だ。鞄の中に入っていたこの二つの弁当箱はどうしよう。
学校に遅れてしまうかもしれないと急いでいたので、ラップをして冷蔵庫か冷凍庫に入れておくという簡単な考えにすら至らなかった。
一つは私がおいしく食べるとして、もう一個のお弁当はどうしよう。今の季節を考えると放課後までに腐る心配はほとんどないとは思うのだが、それでも心配だ。せめて保冷剤ぐらいは持って来ていればよかった。
「あれ、どうしたのそれ？　もしかしてお弁当作りすぎちゃったの？」
「うーん。ちょっとね」
麻美は固まっている私を見かねたのかいつの間にか鞄を覗き込んでいた。そして二つの弁当箱を勝手にむんずと取り出す。
作りすぎた言い訳を考えつきそうになかったので、麻美には隠し通そうとしていたのだが、こうも簡単に見つかってしまうとは思わなかった。
いつも食堂か、売店で昼食を摂る黒葛くんの為に弁当を作ったのだけれど、どうしても受け取ってもらえなかった、なんていえる訳がない。
黒葛くんと一緒に暮らしていることは誰にも秘密で、麻美にすら言えないのは心苦しい。それは相談してしまいたいことではあるが、

黒葛くんの態度から考えてもタブーだ。
もっとも、麻美に打ち明けたとしても普段の私達の交流のなさを見ている彼女は信じてはくれないだろうけれど。
「それじゃあさ、私にその弁当箱一個くれない？　詩織一人じゃ流石に食べきれないでしょ？」
「えっ、いいけど」
私は麻美の申し出をありがたく受けることにした。
私一人じゃ弁当二箱を平らげることなんて不可能だっただろうから正直助かった。それに食べられたとしても弁当箱二個も平らげてしまったら余計に私のぜい肉が増量してしまう。
だけど麻美ってそんなに食欲旺盛な人間だったかな。
私よりは食べていた気がするけど、それでもいつも持って来ている弁当箱の大きさは私と同じくらいでそこまで大差はなかった。
麻美はありがと、と私に礼を言うと、私の弁当箱を机に置き、麻美自身が持ってきた弁当箱をどこかに持っていく。今日はほかの場所食べるのか、それとも何か用事を思い出したのだろうか。
「はい、黒葛くん」
「どうしたんだ、それ？」
麻美は黒葛くんに弁当箱を突き出す。
私は何をしていいのか分からずに立っていただけだった。
「これはね、私が黒葛くんの為だけに作ったお弁当よ。良かったらさ、食べてくれない？」
え？
どうして？
「悪いが弁当なんていらない。俺は今から橋下と学食行く予定だしな」
「本当なの、橋下くん？」
麻美は落ち込みながら橋下くんを見やる。橋下くんは座っていた椅子を思いっきり引いて、勢いよく立ち上がる。
「おい、瀬川さんの手作り弁当を断るなんてどういう神経してるん

だよ黒葛わ。瀬川さん、そんな奴に渡すぐらいならそのお弁当俺にください。うちの母親の手抜き弁当にはもう飽き飽きだ。どうして俺は毎日毎日お昼に昨日の夕食と同じオカズを食べないといけないんだ！　新手の拷問か？」

「んー、そうだなあ。橋下くんが私の為に土下座しながら頼み込んでくれたなら、このお弁当を橋下くんにあげることを考えてあげないでもないんだけどなあ」

本当に土下座しようとしてしゃがみ込む橋下くんを、水溜りを飛び越えるように麻美は飛び越える。

そして嫌がっているように見える黒葛くんに弁当を無理やり持たせる。

「もうっ、そんな顔しないでよ。まるで私が悪者みたいじゃない？　そこまでして黒葛くんを困らせるつもりはないわよ。そんなに嫌なら食べてくれなくて結構よ」

いつの間にか麻美と黒葛くんにクラスの視線が集まってくる。二人ともクラスでは目立つほうだから仕方ないのかもしれない。黒葛くんはその視線に気がついたのか動揺していた。

「だから俺は――」

「だけどせっかくなんだからお弁当の中身見るだけ見てよ。これは私から黒葛くんに贈る初めての愛妻弁当なんだから」

「……ああ、わかった。これはありがたくいただいておく」

ある意味黒葛くん以上に頑固な麻美の性格を考慮したのか、彼は意外にあっさりと折れた。それとも自分の意見を聞かない麻美に、抵抗するのが徒労だと分かったのだろうか。

それにしても麻美は料理が苦手で家事など一切手伝わないと常日頃胸を張っていたような気がするけれど、今日だけは弁当を作ったのだろうか。

「おいおい、俺が口をはさめなかったことをいいことに勝手に進めてんじゃねぇ。黒葛、なんでお前がちゃっかりもらってんだよ。少しで、一口でもいいから俺にも分けてくれぇ！」

黒葛くんは、土下座状態から早くも復帰した橋下くんを宥めながらも、鼻水の出ている橋下くんを苛立ち気に避ける。
「汚いからその鼻水を引込めろ。食堂行くぞ。お前確か今日は弁当ないんだろ？」
えっ、と橋下くんは今自分の鼻腔から鼻水がはみ出ていることに驚く。ずずっとうどんを啜る音に似た音をさせながら鼻水を引っ込める。
「あるわけないだろ。お袋があんたに弁当作るぐらいなら、自分の睡眠時間を確保するほうがよっぽどいいって言われたんだよ！　とうとう弁当作ることすら放棄したんだけど、うちの母親！　このままじゃ餓死するんだけど！　なあ黒葛、毎日俺の弁当を作ってくれないか？」
「その言葉だけを何も知らない人間が聞いたらいらぬ誤解を与えそうだから一生お前は俺に近づくなよ」
片方が言い寄っていて、もう片方が冷めているカップルのように歩く二人を見送っていると、麻美が私にウインクをしてくる。
「ほら、私達も食べましょ」
「……うん。あのさ、質問したいことがあるんだけど」
やばい、自分の思っていたよりも暗い声に焦る。私にはできるだけさり気なく麻美に訊いておかなきゃいけないことがあるんだ。
「いいわよ、私は詩織が訊きたいことはなんなりと答えるわよ。あっ、さっきのトップシークレット以外なら何でもって意味だけどね」
声のトーンをあげる。
「麻美ってさ、ご飯作ったりするの？」
「うーん、今日のお弁当はお母さんがおいしく作ってくれたわよ！」
「……いいの？　嘘ついちゃって」
私は黒葛くんにお弁当を渡すことができなかった。それなのに麻美は普通に渡せている。そんな彼女に私はきっと嫉妬しているせいで刺々しい言い方になる。
「いいのよ。嘘も方便っていうでしょ？　ああでも言わないと黒葛

くんだって受け取らなかったし、詩織のお弁当もどうしていいのか分からなかったんだし、あれで良かったのよ。それに、最近料理はするわ。お菓子作りにはまっているんだけど、今度は弁当に挑戦しようかしら」

ああいう風に私にも強引に黒葛くんに渡せるだけの勇気があればどれだけ楽なんだろう。だけど私の性格がそれを許さない。ひと前ではできるだけいい子であるように演じている私には。

別にクラスの人気者なんかになりたいわけでもないが、私は誰からも嫌われたくない。それはいじめの対象になりたくないだけの汚い自己防衛。

さすがに高校生になってまで誰かをいじめようだなんて幼稚な行いは、少なくとも私が見える範囲の中では認知していない。だけど私が小学生の時にはいじめに似たようなことをされた。

その時は黒葛くんが助けてくれた。いつだって黒葛くんは私の為に身体を張ってくれた。

黒葛くんと交流がなくなってからは人の意見に首を振ったことがなかった。そうやって相手の意見に反した行動をしなければ面倒な諍いに巻き込まれることもない。彼が私を守ってくれなくなり、麻美と出会うまでは私は一人きりだった。そのときに自分なりに学んだ処世術が自分の個性を消すということ。

その期間が長すぎて、自分のアイデンティティというものがどんなものであったのか、さっぱり憶えていない。

だから、麻美のように自由奔放に振る舞える人間を見ていると眩しく感じるときがある。

彼女のように少しでも自分の意見を言えるようになれば黒葛くんとも話せるようになるのだろうか。

「あっ、さっきのお弁当作ったの私じゃないってことは黒葛くんには内緒よ！　だって、黒葛くんに私が平気で嘘をつくような人間だって勘違いされたくないから」

……麻美は少し、自分の心に正直過ぎるとは思うけれど。

黒葛陸視点（3）

†

詩織には俺がついてやらないと駄目だった。

他人よりも行動するのが鈍く、それでいて能天気な性格が災いしてクラスメイトからはいじめ同然のことをされていた。

あえて本人に聞こえるような声量で詩織の悪口をみんなで囁いたり、授業中に先生が黒板に文字を書き始めた時を狙って、消しゴムの残りカスを後頭部めがけて投げたりと、陰湿ないじめが続いていた。

その程度どうってことないと思うだろうが、小さなことが積み重ねって行けば神経が磨り減るような大事に発展していくのは世の真理だ。

詩織はこんなのいじめじゃないって強がってはいたが、俺が見る限りでは、眼に見えてやつれていっているように見えた。

そんな詩織を見るのが嫌で、いじめのようなことが起こる度に俺は詩織を庇い、二人きりになった時は慰めてきた。皮肉にもそれがさらに二人の仲を急接近させる要因になったのだから、人生ってやつは分からないものだ。

そして、いつの間にかいじめっ子たちの標的は詩織から俺にすり替わっていた。

そのいじめ方は明らかに詩織の時よりエスカレートしていた。おそらく、俺が男だからという理由で、多少厳しく当っても平気だと踏んだのだろう。そんなところで過大評価されてもらっても全く嬉しくなかったが……。

みんなは直接俺にかかっては来ず、いじめ独特の陰険な手で俺の

精神をどんどん削っていた。
椅子の上に画鋲を置いたり、上履きを分かりにくい校庭の影に隠したり、教科書にいたずら書きをされたり、ノートを何枚も破かれていたりと、犯人が特定できないようなやり方は俺を徐々に辟易していた。
もしも俺に直接的に攻撃してくるなら立ち向かうか、大人に告げ口をするかどうかしていただろう。
あり得ないことだが、もしも俺にその勇気がなかったのなら無視することもできた。
だけど、やられてみて初めて解ったが、いじめっていうやつは、自分をいじめている相手が分からない状態というのが一番キツかった。
相手がどんな想いで俺を苦しめているのか分からない。
いつになったらこのいじめの連鎖から抜け出せるのか予想ができない。
ーーまるで、生き地獄。
いじめられる度に俺の身体の中では、なにか、どす黒いモノが溜まっていき、毎日吐き気がした。このままじゃ俺は精神が破綻してしまうのではないかという、大げさでない危惧すら感じるようになってきた。
辛かった。
誰かに相談したかった。
だけど……。
いったいこの感情の捌け口をどこに向けてやればいいのか分からなかった。

黒葛陸視点（3）（後書き）

次は早めに更新します。

黒葛陸視点（4）

「何してるの？　りっくん」

放課後俺は教室に残り、自分の机にサインペンで罵詈雑言の綴られた黒いインクをなんとか落そうと四苦八苦していた。

授業中、先生が見回る度に、俺は毎回腕を使って隠していた。そしてその度に、どこからかくすくすと笑い声が漏れていた。

なあ、どうしてお前らは、そんなに嬉々として他人を傷つけることができるんだ。

なんで、俺がどうして後ろめたい気持ちにならないといけないんだ。

俺の心中の何も理解出来ずに、こうやって無邪気に質問してくる詩織が憎たらしかった。

お前のせいで、お前を庇ったせいで俺がこんな辛い思いをしているんだ。

お前、わかってんのかよ。

全部お前のせいなんだよ。

お前が泣けば、挫ければよけいな火の粉は俺に降り掛かることもなかったんだ。

なのに、よくそんな残酷な言葉を堂々と吐けるよな。お前のそういう無神経なところが苛められる原因になるんだよ。そうやって他人のことを思いやれないお前なんて、結局はいじめている連中と根本は一緒なんだ。

いいか、今に見てろよ。あいつら、俺をいじめるのに飽きたら、今度はお前をいじめることに本腰を入れるぞ。きっと、この前いじめのやり方は飽きたから、もっと残酷ないじめになっているだろうな。今のうちにそうやって精々笑っていろ！！

……最低だな、俺。
ただの八つ当たりじゃないか、こんなの。
もう、俺には関わるな。
「……なんでもねぇよ。あっ、」
咄嗟に腕で隠した文字を無理矢理こじ開けられ、詩織に見られてしまった。
いちいち詩織に愚痴をこぼすのも憚られるし、こいつにだけは自分のみっともない姿を見られたくなかった。だけど、こうなってしまったら、もう開き直って笑うしかない。
「どうだ？　笑えるだろ？」
これは全部お前のせいなんだ。
お前なんてやつを庇って俺はすげぇ後悔しているよ。
……っていっても、鈍感なお前はこの惨状を見てもどうしたの、これ？　って他人事のように訊いてくるんだろうな。
詩織に顔を向けると、俺はぎょっとした。
詩織は大粒の涙を流していた。泣きそうになったことは何度なく見てきたが、彼女が涙を流すのを見るのは初めてのことで、かなり狼狽してしまった。
情けないもので、生まれた時から女の涙に弱く、この時の俺は右往左往するしかなかった。
他の奴だったらこういう事態に陥った時にどう対処するんだ。
くそっ、こういう時に咄嗟の機転を利かすことができないから俺ってやつは……。
どうにか、ない頭を絞って打開策を捻り出さないと、俺はあの時の誓いを破ることになる。
「……ごめん。ごめんね、りっくん」
何のことについて謝っているのか分からず、俺はどう答えていいのか、どうやったら詩織の涙を晴らせるかどうかを考えていた。そうすることしかできなかった。
今まで俺は詩織とコミュニケーションをとる上で悩んだことはな

かった。なぜなら物心ついた時から俺達はいつだって傍にいたからだ。まるで二人は兄妹のように、いや本当の兄妹よりも仲が良くて、まさに以心伝心していた。

だから、だからこそ何をすればいいのか。

「……私の、せいだよね」

詩織はなんとか涙をこれ以上流さないようにと、堪えながら自分の本心を紡いでいく。

「私がとろくてみんなを怒らせちゃったから、こうしてりっくんにまで飛び火しちゃったんだよね。私、馬鹿だけど、それぐらいは分かるよ。最低だよね？　私」

「そんなことはねぇよ」

言葉は、思考せずとも勝手に飛び出した。

「ううん、最低だよ。本当はちょっぴりそうなのかなって思ってたんだ。だけどそれを認めたくなかった。もしも黒葛くんのいじめを止めようとしたら、また私がいじめられちゃう。それが怖かったの。自分の弱い心に負けちゃったんだ」

詩織の目尻に透明なものが溜まっていく。

「ねぇ、もう、私はりっくんに近づかないから。一生りっくんとは関わらない。だから、もう大丈夫だよ。もう――」

詩織はわっと泣きながら顔を伏せる。それ以上は涙のせいで言葉が続かないみたいだ。嗚咽が徐々に強くなっていく。背を丸めながら必死に感情が溢れ出てこないようにと堪えている。

はあー、うぜいな。

あーあ、無性に面倒臭くなってきた。

俺ってこういうタイプの女子って本当に苦手なんだよな。泣けば何でも許してもらえるって思っているタイプ。そういう茶番劇は俺がいないどっか遠くでやって欲しいもんだ。

なんかこういう感じ嫌なんだよ。俺が悪くないのに、何でもいいから謝らないといけないみたいな雰囲気。こういう重いやつはどう対処していいのやら。

……ほんと。
……ほんと、馬鹿だよな……お前は。
自分がいじめられている時には全くへこたれていないようにみんなの前では気丈に振舞っていた。俺の前でさえも弱みを見せないようにって、完全には泣き顔をみせなかったくせに、なんだそのザマは。
泣きすぎてかなり面白い顔になってるぞ、お前。
「別にいいよ、そんなこと」
……おいおい、なんだよ。どうしたんだよ、俺。
まったく、これじゃあ俺だって詩織のこと馬鹿にできないな。
どうしてだろうな。なぜか俺の意思とは関係なしに勝手に涙があふれてるんだ。
はっ、ふざけるなよ、俺はこいつの前で泣きたくねぇんだよ。弱みを見せたくないんだよ。
女の前で泣くとか最高にかっこ悪くて……みっともなくて……穴があったら入りたいぐらいだ。
俺ってこんなに涙脆い人間だったか？　こんなに感情が簡単に揺り動く人間だったのか？
おそらく、こんなに俺が弱い人間になるのはおそらくこいつと一緒に居るときだけなんだ。
だけど、この弱点はきっと短所じゃない。
詩織の傍にいるときだけ弱くなるってことを裏返せば、自分の弱みをこいつにだけは見せられるってことだから。
それは俺にとって、こいつは、――雛原詩織が――特別な存在ってことなんだ。
「泣いているの？」
あのな、泣いている男に向かってそんなこと訊いたらこっちの立場がなくなるって知ってるか？　本当にどうしようもない奴だな、お前は。やっぱりお前には俺が傍にいて色々教えてやらないと駄目みたいだな。

「泣いてない」
自分の弱さを曝け出せる存在があるってことは、きっととても幸せなことで、絶対に手放してはいけないものなんだ。
だけど、やっぱり今は強がりたい。強がらなきゃいけない。それは女からしたら、くだらなくて安っぽいプライドだって笑われるのかもしれない。
けれど、俺はお前の前では精一杯笑っていたいんだ。
「りっくん、泣なかないでよ。りっくんが泣いていると私までぇ――」
詩織は思い出したかのように再度思い出したかのように泣き出す。
ほんと、こいつは俺の気持ちを理解してくれないな。見て見ぬふりっていう言葉を知らないのか、こいつは。
でも、だからこそ??。
俺は詩織にアイアンクロー気味に目隠しをする。
うぐっと女らしからぬ声を上げるが俺は気にしない。
これで俺の恥ずかしい泣き顔は詩織には見えないし、これなら普段は言えないような馬鹿な言葉も言える。
今日だけは特別サービスだ。明日からは今まで通りだから調子に乗るなよ。
「俺はいま泣いていない。だから、お前の傍にいても全然辛くないってことだ。……だから、お前は俺の傍にいてもいいんだ」
こうでもしないと自分の心に素直になれないんだ。
ちょっと前までは詩織のことは人目を憚らずに好意を抱いていることを、口頭で、おくびにも出さずに触れ回ることが可能だった。
けれど最近、それができなくなっていた。
どうしてそうなるのか、このときまで俺は解らなかった。
やっと解った。
それはきっと――俺がお前の顔を直視出来ないほどに好きになってしまったからなんだ。

†

黒葛陸視点（４）（後書き）

だいたい三分の一ぐらい消化しました。まだ読みたいという希有な人は、もうしばらくおつき合いください。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4147z/

アイス

2011年12月31日17時50分発行